

里山グループ



エコグループ

明治神宮の杜を見て

福田 美伸

先日、東京へ行った折、以前よりもう一度と
思っていた明治神宮を訪れました。学生時代に
二度訪れ、さらに50年以上経った今回は三度
目である。明治天皇と昭憲皇后をお祀りする明
治神宮は、約170万平方メートルの広大な鎮守
の杜で、30m近くなった高木を見て、私はこの
杜にいっそう魅了されました。

明治天皇と昭憲皇后の崩御後、陵墓は京都の
伏見桃山となったが、国民の願いによって明治
天皇を祀る神社を東京に創建する運びとなった。
当時は荒地の様相であった土地に、永遠に続く
鎮守の杜を作る。そのためには自然林に近い状
態を作ることが必要だと考えた。そのプロジェ
クトの中で森林担当の主査を務め、設計したの
は、ドイツで森林学を学んだ本多清六博士と庭
園分野の本郷高德、上原啓二の3人であった。
本多は100年先まで見据えて段階的に成長し
ていく森を構想した。多くの神社では杉が植え
られているが、この地では難しいと考え、椎、
檜、楠の常緑広葉樹森の主木として選定した。
当時の内閣総理大臣大隈重信は大反対した。大
隈は伊勢神宮にあるような荘厳な杉林を強く求
めた。本多らはいかに杉林がこの地には適さな
いかを林学的な見地から説明し、ようやくプロ
ジェクトを進めることができたと言う。全国か
ら奉納された献木が約10万本植えられ、1920
年に明治神宮は完成した。102年経った今、明
治神宮の杜は本多らが描いた永遠の自然林が完
成したと言えるだろう。

私たちの「ならやま」も部分皆伐で10年や
20年の短いスパンではなく、50年、100年先
を思い描き、孫やひ孫たちに受け渡すことの
できるものを残してやろうではありませんか！

<参考文献>明治神宮“杜・見どころ”

<https://www.meijijingu.or.jp/midokoro/>

野菜作り見習い

岸田 玲子

昨年入会后、エコファームの活動に参加する
ようになって、まもなく一年が経とうとしてい
ます。全てが新鮮で勉強になる一年でした。な
らやまのレタス栽培の真似をして、家でもマル
チシートを敷いてサンチュを作ったら今年はと
ても上手く出来ました。以前は直植えしていた
為、泥はねで葉が汚れたり腐ったりしていたの
です。

菜花の植え付けで余った苗を少し貰い、家で
植えてみましたが、収穫のタイミングがわから
ずそのまましておいたら、花が咲き乱れてき
ました。菜花はもっぱら『ならやま産』を購
入して食べ、我が家の菜花は観賞用となってい
ます。同じく、有効期限の迫った小松菜の種を
ばら蒔いたところ、綺麗な黄色の花が咲いて春
の彩りを添えてくれています。

野菜の栽培は難しく、なかなか思うよう
には育ってくれませんが、これからも見よう見
まねでチャレンジしてみたいです。

ならやまで旬の野菜をたくさん買って帰ると
その下処理や保存にアタフタしますが、知らな
かった調理方法や食べ方を教えてもらって野菜
の食生活が、ずいぶん豊かになったような気が
します。

以前は捨ててしまっていた大根の葉っぱも、
ちりめん雑魚・鰹節・胡麻などと共に佃煮にし
て美味しくいただいています。スーパーで買っ
てくる小綺麗な野菜よりも自分たちで作った野
菜には愛着が沸き、美味しく感じられるのです。



虫だより

昆虫の季節型

菊川 年明

私たちがならやまでよく目にする昆虫の中で同一種であるのに季節により大きさ、翅の色彩や形などが変わるものがあります。その変化がよく見られるのはチョウ類で、年間に何回も発生を繰り返す種に見られます。それぞれ春型、夏型、秋型と呼ばれています。

季節型がよく目立つチョウのグループはアゲハチョウ類、シロチョウ類、タテハチョウ類、シジミチョウ類などの一部です。

特徴は概してのことではありますが、春型は小型で翅の様子は鮮明、色彩は鮮やかです。夏型は大型で、翅の様子は鮮明さが少し乏しく、色彩は少し暗色になります。タテハチョウ類などのごく一部に春型がなく、夏型と秋型のものがあります。その中でもキタテハは典型的で、翅の色彩は、夏型の表面はオレンジ色、裏面は黄褐色、秋型の表面は赤みが加わり、裏面は暗褐色になります。加えて、秋型の翅の縁の切れ込みは夏型より深くなります。

秋型のチョウはほとんど成虫態で越冬し、春にはまた活動しますので次世代は夏型になります。

写真はキタテハの翅の裏面で、夏型(上)と秋型(下)です。違いがよくわかるのは翅の縁の切れ込みです。

夏型は浅く、秋型は深いです。翅の裏面の色彩は夏型黄褐色、秋型暗褐色で、モノクロの

写真でも夏型に比し秋型は黒ずんでいるのがわかりいただけだと思います。



里山の今



花だより

スマレ

山本 美智子

スマレは日本の春を彩る野草の代表です。世界では400種以上が広く分布し、日本には約50種。よく見ると何とも変わった花形をしています。5弁花で左右対称。後ろにツンと突き出た「距」という部分があります。子どもの頃、この距に花をからませ、引っ張り合って遊んだ思い出があります。

スマレには地下茎で増える仲間と、地上茎で増える仲間があります。また、花色は、紫、淡青、紅紫、白・・・葉型は、丸、卵、三角、長、心形・・・香りのある少数派も。同定は難しいが、葉の形、葉がねるか・立つか、無毛か有毛かなど。ならやまでタチツボスマレ・シハイスマレ・ノジスマレなどが見られます。

種子は、普通の花からの結実は無く、閉鎖花という種子だけを担う柄を伸ばします。種子が熟すと閉鎖花は上を向いて種を勢いよくはじきとばし散布します。3mも先にとばすこともあるそうです。

種子は、「エライオソーム」という物質でコーティングされていて、これは、アリの好物です。巣に運んでエライオソームだけ食べ、あとは巣の外へ捨てます。捨てられた種子がその場所で発芽します。石垣の隙間など驚くような場所で咲いているのは、運び屋のアリの仕業だったのです。これはスマレの生き残り作戦の長い進化の結果です。命名は花を横にした形が大工の道具の墨入れに似ているからとの説が一般的。「スマイレ→スマレ」。(他説もあります)

万葉集や、短歌、俳句、宝塚歌劇団の歌詞、可愛らしさを人の名に託したり、日本人が深く親しみ、愛でられてきたスマレ。

山路きて 何やらゆかし 菫草

(松尾芭蕉)